

カンボジアにはいま激しく変化する「時代の風」が吹いています。3月はじめ 2015 年度後期分の奨学金を届けるため、支援地域を1週間、駆け足で回ってきました。その「風」の勢いを改めて感じています。以下、その報告です(金子)。

《時代の風・その1》



写真：タッコー高校の奨学生に奨学金を届けた。向かって右の2人目が KEAF 金子、左側の2人は同校先生、その奥が奨学生。

カンニング封殺で大量留年生

高卒・大学入学資格試験に異変

カンボジアの教育制度はフランス植民地時代の名残りで高卒・大学入学資格を得るためには全国統一試験にパスしなければなりません。この試験で大掛かりなカンニングが行われてきたことが昨年明るみに出て、再試験が実施されました(2014.12 会報 73 号参照)。その結果、大変な変化が起きました。

KEAF が支援する4つの高校では例年、80～90%が合格していました。ところが再試験に合格したのは40～30%と大幅ダウンとなったのです。このため4年制大学を断念し、大卒資格のいらない短大に回った生徒や諦めずに留年して来年、再チャレンジする生徒が多数出ました。これまでも留年生はいたそうですが、数十人もの大量留年生を抱えるのは初めてだと、どこの高校でも先生

たちは頭を抱えていました。

でも、いいことだとも受け止めています。カンニングは悪いことなのに、「そう言うものだ」となっていた。ちゃんと勉強して公平な競争をする。これで学校が本来の姿になるのであればいいことだ、というわけです。

カンボジアではポル・ポトの恐怖政治のもとで西欧式教育は校舎も制度も徹底的に破壊されました。そのあと10 数年の内戦が続き、1993 年にやっと国連監視のもとで総選挙が行われて、国家再建が始まりました。教育もほとんどゼロからの再出発でした。どうすれば子どもたちを学校に来させられるか、から始まりました。KEAF が支援する子どもたちの親の世代はもとより、兄や姉たちでも高校に行くのは珍しいという時代が続きました。今はほとんどが高校まで進むのが当たり前になりつつあります。

カンニング事件は、子どもたちを学校に来させる時代から、学校はしっかり勉強をするところという、大きな変化のきっかけなるのかもしれません。

《時代の風・その2》

待望の新校舎建設始まる

ボロボロ校舎はやっとお役ご免へ

バンティチャクライ中学で新校舎の建設が始まりました。同中学は1993年にCEAF(KEAFの前身、2007年に分離)が建てた5校のうちの最初の学校です。現在の4教室に加えて4教室の新校舎が6月に完成の予定です。建設資金は日本のNGO(JHP)が支援しています。CEAFが建てた4教室と合わせて8教室となり、1教室は図書室にする計画だそうです。

生徒数が年々増えてトタン葺きの旧校舎も使ってきました。すっかりボロボロになっているので、新校舎ができればお役御免になります(次頁の写真)。

KEAF が支援しているプレイヴェン州と一部スヴァイリエン州の計14の学校・養護施設のうち3つの高校でもこの1年余の間に何れもJHP 其他国際NGOの支援によって新校舎が建てられ(以下、次頁へ続く)

(1 頁から続き) ほぼ2部授体制は解消しました。

カンボジアでは首都プノンペンと州都などの大都市を除けば、ほとんどの学校で教室が不足して、二部授業でしのいでいるのが常態です。



写真：バンティチャクライ中学で新校舎の土台作りの工事が始まった。

KEAF が支援するベトナム国境沿いのプレイヴェン、スヴァイリエン両州は貧しいカンボジアの中でも特に貧しい地方とされています。二部授業がこれほど早く解消できるとは思っていませんでした。



写真：新校舎が完成すればトタン屋根の旧校舎は取り壊される。左奥の校舎はC E A F が 1993 年建設。

《時代の風・その3》



写真：プラティアート中学校庭に設置された太陽光発電パネル。

パソコン用電気は太陽光パネルから 免許証なしのバイク通学急増

電気が点く学校はまだ一部。必要なときは自家発電機を使う。ガソリン代の負担が重い。プラティアート中学の教員室前の校庭に太陽光パネルが設置されていた。カンボジアでは雨期でも時折のシャワーのほかは昼間は太



写真：教室前にずらりと並んだ生徒のバイク。

陽がいっぱいだから、蓄電池なしで先生たちのパソコンに常時、十分な電気が流れているとのこと。ほかにも太陽光を使っている学校はあるかと聞いたら「知らない」と得意げだった。

もうひとつ驚いたのは、校庭にびっしりと駐車しているバイクの数。免許は16歳からなので生徒はほぼ全員、無免許運転だ。工場に出稼ぎに出る人が急増して現金収入が増えているから、との校長の話だった。

第4回サッカー教室、13校で開催

ボール93個、ユニフォーム45着など寄贈

第4回目のサッカー教室は2014年12月21-31日にかけて小中高各4校と養護学校1の計13校で開催しました。コーチの小林俊文先生（群馬県立渋川青翠高教諭）に KEAF 岡宮喜雄さんと内田義博さんが補佐役を務めました。

小学校（プロモルプロム、ソンボン、アンサー、プレイトープ）および中学校（プロモルプロム、バンティチャクライ、プラティアート、プレイトープ）、養護学校（ラスペカ）の9校ではサッカーを楽しむプログラム、年明けに全国大会州予選が始まる高校（プロモルプロム、タッコー、コンポントウラバイ、プレアンドウン）では実戦指導を行いました。

小林先生がかかわりを持つ中高校やサッカー関連団体などから寄贈を受けた（中古および新品の）サッカーボール93個、ユニフォーム45着、および先生の教え子である同高校生徒会などから託されたノート、鉛筆、ボールペンなどを各学校に寄贈しました。



（写真はスヴァイリエン州アンサー小学校で。
左のブルーのシャツが小林先生）

800人と目と目、手と手で挨拶

内田 義博

サッカー教室の合間に1,000名の子どもたちと目と目、手と手を握って挨拶を交わす目標をたてた。そのための道具として、①私の出で立ちを高めるためのサングラス。②東京の寿司屋ではどこにも置いてある写真入りの綺麗なチラシ2枚。③アンケート用紙（i 名前、ii 年齢、iii 朝起きた時間及び朝食べたもの）を用意した。

学校に到着。まず車からサッカー用具を下ろす。準備

に取りかかる時の対応が①のチャンス、②は休憩時間、そして③は教室終了後の下校の時だ。

学校に到着するやまず子どもたちに向かってサングラスを指さし「悪い男」だと!! 次にそのサングラスを跳ね除け「良い男」だと!! そしてニヤット笑って舌を出す。その結果大勢のこどもに囲まれたのだ。



（写真はプラティアート中学で）

クメール語で丁寧に挨拶。50人はゆうに超えていた。休憩時間も同じ手法で30人以上のこども達と接することが出来た。最後はサッカー教室終了後の下校時。歩いて、自転車で、そしてオートバイで帰宅するこどもたち。

彼らに向かって再度一人ひとり丁寧にクメール語「チョンムリアップスオー」「プロコーイ」「プロスラオー」「オークン」と挨拶。1,000名の当初目標を達成すべく、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるではないが、日本語、英語でスピードを持って、相手の目を見ながら対応したのである。こどもたちから日本語でサヨウナラ、英語ではサンキュウと返事があった。

アンケート用紙にも10人に答えてもらうことが出来た。年齢は11～18歳、男性は3人、女性が7人。朝起きた時間は4:30～6:00が9人。1人だけ7:00の子がいたが午後のクラスのこどもであった。朝食は全員ごはんとおかず、食べた場所は校庭内または周辺の屋台で、代金は25～30リエル（約1円）とのことである。

東京から持ち込んだ寿司のチラシを見せたところ、食べたことも見たこともないこどもがほとんどで、1人だけが日本食だと聞いた記憶があると言っていた。

このような段取りで少なくとも800人と対応できた。こどもたちの多くは生まれて初めて外国人と向かい合ったのだろう。KEAFの先人たちとのこの類いの対応を通して、多くのこどもが日本に興味を持ち勉強をしていることだろう。さらに続く多くの若者が出てくるキッカケ作りになることが今回の私の意図である。



写真1：バイクを降りて歩いた（2012年）



写真2：念願の橋が完成

念願の橋ができた

プレイトープ小中校、初めて車で訪問

KEAF がカンボジアの子どもたちの支援を始めた8年前、乾季でも車で訪問できる学校は半分もなく、大半の学校には村の青年のバイクの荷台にしがみついで連れて行ってもらうしかありませんでした。ところが今回の訪問で、15の支援学校のうち唯一、バイクでしか行けなかったプレイトープ小中校を初めて車で訪問することができました。同校に行くには小さなクreekに板を渡した橋を渡ります。2人乗ったバイクでは危ないので降りて歩いたものです(写真1)。雨期には水に没してしまいます。ここに昨年、やっとコンクリート製のしっかりした橋が架かったのです(写真2)。

プレイトープはプレアスダイ郡の一番南に位置し、すぐ先はベトナム国境という地域。要望を受けて教科書や学用品などの支援品を持って学校に行くことができず、周辺の学校に預けて帰ることもよくありました。先生たちから「橋を造ってもらえないか」と注文されたこともあります。

昨年には近くにチョーテール高等学校が開校し、念願だった橋がようやくできて、先生も生徒も、みんな大喜びしていました。校庭の石つくりのテーブルとイスの「談話コーナー」に集まって生徒たちとゆっくり交流することができました(真ん中の写真)。

プレイトープ中学を卒業して高校に進む生徒の中から毎年5人に奨学金を出しています。一番近い高校でも10数キロも離れたプロモルプロム高校でした。

自転車で通学するのは無理なので、KEAF が支援した寄宿舎にはいたり、親戚を頼ったり、あるいは学校の近くに数人の友だちと共同下宿するなどしています。

誰でも通学可能な高校が近くに開校したのも朗報です。写真の左側で背中を見せているお下げ髪の

少女は、チョーテール高校に進学したKEAF奨学生のチュウン・ラタナさんです。



※写真つき奨学生紹介の4、5、6頁は
個人情報保護のために省略

ありがとうございました (2014年12月1日～2015年3月3日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。

(東京世田谷北沢) (東京) (東京) (神奈川) (千葉)
(福島) (神奈川) (東京) (群馬) (東京) (東京)
(千葉) (東京) (東京) (東京) (千葉) (東京) (神奈川)
(東京) (神奈川) (東京) (大阪) (神奈川) (東京)
(神奈川) (東京) (神奈川) (東京) (東京)
(東京) (兵庫) (神奈川) (埼玉) (東京) (東京)
(神奈川) (長野) (東京) (埼玉) (埼玉) (東京)

◇物品の支援ありがとうございました ○ (東京) : 子どもたちへの飴

○ (千葉) : ノート 150 冊



メコン川をまたぐネッルーン橋が完成

カンボジアとベトナムをつなぐ国道1号線にメコン川をまたぐネッルーン橋が完成し、4月6日に開通式典が催されます。日本の援助によるもので、ゼネコン各社の共同企業体が建設に当たりました。

国道1号線は両国にとって大動脈です。米などの農産物や各種生活物資を運ぶ大型トラックや、プノンペンやアンコールワットへの観光バスがひっきりなしに疾走しています。

プノンペンから車で約1時間半、メコンの兩岸にまたがるネッルーンの町です。すぐにフェリーに乗れば15分ほどで対岸です。しかし帰省シーズンなど交通量の多いときは何時間も待たされることがあります。これが直通になるので、両国の経済や社会に大きな刺激を与える

でしょう。

ネッルーン橋とは通称。正式には翼橋というそうです。兩岸に近い2カ所の柱で橋を吊っています (写真)。これが大きな鳥が羽を広げているように見えるからです。

橋ができると地元の町がさびれるという心配がありました。しかし庶民の足としてフェリーは残り、港も商業港として拡張する計画で、町に新たな発展のチャンスが生まれています。

KEAFが支援しているのは対岸から車で1～3時間の地域。対岸のホテルを現地活動の基地にしている、朝晩の食事はこの町で食べます。朝のカンボジア・そばは楽しみ。夕食もいろいろありますが、秋口のメコン・エビは絶品。私たちにとってもなじみ深い町になっています。